

因島市遺族会

因島市遺族会の概況

本市は、昭和二十八年五月一日に、旧御調郡土生町、田熊町、三庄町、中庄町、大浜村、重井村および旧豊田郡東生口村の七か町村が合併し、市制施行し現在に至っている。

また、明治二十二年の大合併当時からあった旧三浦村は、市制施行より前の昭和二十三年五月三日に、椋浦が三庄町に、外浦、鏡浦が中庄村にそれぞれ編入されている。

市制施行以前から各町村には独立した遺族会が組織されていたが、因島市となったことにより、昭和二十九年因島市遺族会が発足することになった。

こうした経過もあって、現在も旧町村単位で遺族会を組織しており、因島市遺族会はこれら各地域で選出された理事、代議員に連合会形式で運営されている。

旧町村単位の遺族会の沿革はつぎのようになっている。

◎旧大浜村（大浜町）

名称 大浜村遺族会

発足 昭和二十八年四月二十七日

歴代会長氏名

初代 宮地 筆市、二代 河野 祥造、三代 大出 勘市
四代 村上 松一、五代 榎原 春松、六代 麓志 津代
七代 須山 登（現在）

現在の役員氏名

婦人部長 榎原ヒロ子

役員 河野八重子、村上フサコ、宮地美佐子、榎原カ子コ
忠魂碑等

明治四十三年、日清、北清、日露戦戦没凱旋記念碑が大浜村齋島神社境内に建立される。

昭和十二年五月、大浜町齋島神社下神社境内に忠魂碑が建立される。支那事変、大東亜戦争の戦死者八七柱も合祀されている。

行事

大浜町遺族会の主催により、毎年八月十五日に町の戦没者慰霊祭を行っている。

◎旧重井村（重井町）

名称 重井村遺族会

発足 昭和二十五年四月、村会議員村上福造氏が発起人となり遺族婦人とともに結成。

歴代会長氏名

初代 村上 福造、二代 柏原 悦市、三代 柏原 舒延
四代 柏原 肇（現在）

現在の役員氏名

婦人部長 峰松タツノ

役 員 村上マスエ、大出キクコ、藤原みどり、村上タケコ

村上エミコ、村上ミチコ、峰松チエコ、峰松サカヨ

佐々木ヤスコ、柏原トキオ、柏原キヨコ、藤井シズコ

西原ヤスコ

忠魂碑等

明治五十三年十二月、重井町の区長会、傷痍軍人会、遺族会及び各団体が発起人となり、町内の寄附金により善興寺前の寺院敷地内に慰霊碑、戦没者記念碑及び霊名碑を建立。

行事

重井町慰霊碑護持会の主催、重井町遺族会の共催のもとに毎年十一月三日、慰霊碑前に於て町の慰霊祭が挙行される。多数の関係者の傘下を得て神主により祝詞、玉串奉奠の神式行事があり、その後、僧侶による読経、戦没者全員の戒名を讀上げ、遺族会婦人部のご詠歌のもと焼香がなされる。

◎旧中庄村（中庄町）

名称 中庄村遺族会

発足 昭和二十一年一月、中庄村長を長とする中庄村同胞後援会を前身として発足。

歴代会長氏名

初代 宮地 豊、二代 田頭 勝市、三代 松浦 義雄

四代 柏原 久人（現在）

現在の役員氏名

婦人部長 宮地伊末恵

役 員 舟橋 康夫、田頭フミ子、宮地 広子、柏原 清子

時本サダ子、築地フキエ

忠魂碑等

昭和十一年頃、元中庄小学校グラウンド（現中庄町民グラウンド）の隣接地に建立。終戦後、忠魂碑の名称を平和塔と改造したが、後日忠魂碑に改めた。ほかに、日清、日露戦戦没凱旋記念碑（正式名称不明）が、明治四十年六月に建立されており、近年老人クラブ有志により清掃奉仕がおこなわれている。

◎旧三浦村（外浦町、鏡浦町、棕浦町）

旧三浦村には、独自の遺族会組織はなく、昭和二十三年に棕浦が三庄町に、外浦、鏡浦が中庄村にそれぞれ編入されていたことから、現在、外浦町と鏡浦町は中庄町に、また棕浦町は三庄町の遺族会に所属し、活動をおこなっている。

現在の役員氏名

外浦町 田頭ヤエコ、井上ミチエ

鏡浦町 梶平まつゑ

棕浦町 谷口キク子

忠魂碑等

外浦町 明治四十一年四月、町内の良神社境内に日清、北清、日露

凱旋記念碑が建立されている。

鏡浦町 明治四十二年九月吉日、町内の厳島神社境内に日清、北清、

日露凱旋記念碑が建立されている。

棕浦町 大正二年三月上旬、日清、北清、日露凱旋記念碑が建立さ

れている。

◎旧東生口村（洲江町、原町）

名称 東生口村遺族会

発足 昭和二十三年四月

歴代会長氏名

初代 香川 喜吾、二代 寺西 猪平、三代 橋岡重一郎

四代 香川 正一、五代 香川 一夫、六代 宮森 武雄（現在）

現在の役員氏名

婦人部長 宮本スミ子（洲江町）、小金 速子（原町）

役員 新崎 清

忠魂碑等

昭和三十六年十二月、原町薬師寺境内に戦没者供養塔を建立し、支那事变、大東亜戦争の戦没者五七柱を合祀する。

昭和三十二年十一月三日、洲江町正善寺境内に「久遠霊光」を建立。

戦没者二九柱を合祀の際、慰霊祭を挙行した。平成三年には、五〇

回忌法要を行った。

◎田熊町

名称 田熊町遺族会

発足 昭和二十三年四月

歴代会長氏名

初代 田中清兵衛、二代 岡野幾太郎、三代 村上 富夫

四代 村上 祝一、五代 村上 柳三（現在）

現在の役員氏名

婦人部長 岡野ミチコ

役員 岡野美智枝、山岡ヨシエ、岡野 俱子、木谷 勇雄

岡野ミサエ、岡野 睦栄、藤原 康次、岡野 宗次

岡野 夏子、岡野 孝次、岡野 末実、村上チエ子

沼本シズ子、岡野 周藏

忠魂碑等

明治三十一年九月、田熊町八幡神社拝殿西側に義勇の碑を建立する。

大正七年四月、浄土寺境内鐘撞堂横に忠魂碑を建立する。

大正八年八月、日清、北清、日露、第一次大戦の記念碑。

行事

田熊町遺族会として、毎年四月八日の花祭の際に、浄土寺位牌堂の前で慰霊祭を行っている。

◎土生町

名称 土生町遺族会

発足 昭和二十三年

歴代会長氏名

初代 村上 厚平、二代 弓場好之助、三代 木村 元晴

四代 櫛橋 幸男、五代 橘 忠知（現在）

現在の役員氏名

婦人部長 久原ヨシノ

事務局長 小坂久美子

役員 久原 洋、宮地 優、村上 武夫、八木美代子

巻幡 光雄、巻幡 泰子、山仲ヨシ子、郷 春子
吉原ヨシエ、村上ヨシコ、西面 恒三、近藤 君子
津崎チズ子

忠魂碑等

大正十三年三月、大山神社境内に忠魂碑を建立する。その後、同神社前の道路整備並びに平成殿（社務所）建設により、昭和六十三年十月、道路に面した場所に移転する。移転の際には、支那事变並びに大東亜戦争で戦死した土生町出身者三六六名の氏名、戦死場所、戦死年月日及び享年が記載された霊名帳を忠魂碑内部に収める。また、同神社平成殿が落成し、三階に祖霊殿が設けられ、戦没者の御霊が合祀された。

行事

三月十三日春季祖霊祭、七月三十日万灯夏越祭、九月二十三日秋季祖霊祭には他の神々と共に式が行われる。

また、偶数月の第一日曜日には、土生町遺族会役員により、忠魂碑の清掃奉仕が行われている。

◎三 庄 町

名称 三庄町遺族会

発足 昭和二十三年

歴代会長氏名

初代 坂井 重義、二代 山内サカエ、三代 秦 米三

四代 村上 博（現在）

現在の役員氏名

石田 三郎、石田 安成、楠見 久枝、円福寺鶴子
藤川 房子、片桐ヒサコ、岡 豊、宮地 哲治
上田トシコ、岡本エミコ、長尾出世松、長尾 福一

忠魂碑等

昔は存在したが、終戦後進駐軍に遠慮して取り壊された。三庄町には現在それらしい痕跡はどこにも見当たらない。

これら七町村が合併して昭和二十八年に因島市が設けられたことにより、昭和二十九年に旧町村の連合組織として因島市遺族会が発足した。各町の遺族会長、婦人部長、青年部長並びに事務局長が理事として参加しているほか、各町から選出された代議員により会の運営が行われている。

因島市遺族会には、会長以下八名の役員が置かれ、理事会において互選される。

現在二三名の理事並びに一七名の代議員によって英霊の顕彰及び慰霊に関する事業や遺族の慰安親睦に関した諸事業がおこなわれている。

なお、歴代会長は次の通りである。

初代 弓場好之助、二代 坂井 重義、三代 田頭 勝市
四代 松浦 義雄、五代 橘 忠知（現在）

また、昭和四十一年には因島市遺族会によって田熊八幡宮神苑内に因島護国神社が建立され、因島市出身者一、三一一柱の英霊が合祀されることとなった。

建立年月日 昭和四十一年五月十三日

建立者 因島市遺族会

祭主 田熊八幡宮
施工 (株)加藤組
祭主捧歌 一 国の為 命ささげし勇士の
御霊和めん 今日のお祭

二 座す如く 目にも見え来て 懐かしも
今日の祭に その世偲べば

遷宮慰霊祭 昭和四十一年八月十五日

例大祭 毎年八月十五日 (平成六年度から日程変更を予定)

昭和六十一年四月には、田熊八幡神社の参道から分岐して因島護国神社への参道を整備するため、新たに石段と七五三柱を設置した。なお、現在は、拝殿の新築に向けて着々と準備が進められている。

また、偶数月の第一日曜日には土生町遺族会役員により、因島護国神社の清掃奉仕作業が行われている。

因島市戦没者合同慰霊祭は、昭和四十七年に因島市民会館が出来てからは、毎年同会館で行うようになった。毎年五月下旬に神式と仏式を一年交替で挙行している。

本会では、毎年代議員総会を開催するほか、概ね年に五回程度理事会を開催して、当面する懸案事項について協議が行われている。十月二十三日の備後護国神社大祭には、毎年、大型バス二台で参拝するなどして、英霊顕彰事業の推進にあっているが、近年会員の高齢化、減少化が進むなかで、組織の充実強化の観点から会員の親睦行事にも力を注いでおり、多数の会員の参加を得て、靖国神社参拝や親睦旅行を随時実施している。

また、傘下に因島市遺族会婦人部 (榎原ヒロ子部長) 並びに同青壮年

部 (久原 博部長) があり、それぞれの立場で活動を行っている。
今後は、後継体制の確立に向け一層の組織強化を図っていくことが緊急課題となっている。

因島市遺族会役員名簿

会 長	橋 忠知 (兼理事)
副 会 長	柏原 久人 (兼理事)
副 会 長	柏原 肇 (兼理事)
婦人部長	榎原ヒロ子 (兼理事)
〃 副部長	岡野ミチコ (兼理事)
〃 副部長	峰松タツノ (兼理事)
青壮年部長	久原 洋 (兼理事)
会 計	村上 博 (兼理事)
会計監査	宮森 武雄 (兼理事)
会計監査	小坂久美子 (兼理事)
理 事	村上 柳三、須山 登、久原ヨシノ、石田 安成、楠見 久枝、谷口キヌ子、梶平まつゑ、田頭ヤエコ、岡野美智枝、宮地伊末恵、小金 速子、宮本スミコ、代議員 宮地 優、村上 武夫、八木美代子、藤川 房子、圓福寺鶴子、井上ミチエ、山岡ヨシエ、岡野 俱子、田頭フミ子、宮地 広子、柏原 清子、時本 貞子、村上マスエ、大出キクコ、藤原ミドリ、河野八重子

新崎 清

■因島市遺族会

英霊柱数 一、三一二柱

遺族数 七二五人

婦人部 一八二人

青壮年部 一〇三人

会費の徴収について

1 公務扶助料受給者 一、七〇〇円

2 特別弔慰金受給者 七〇〇円

各地区役員が訪問し徴収している。

因島市からの助成金

三一五、〇〇〇円（平成五年度）

因島市戦没者合同慰霊祭について

主催 因島市遺族会

北朝鮮（鎮南浦）から引き揚げて

因 島 河 野 八重子

鎮南浦でおば夫婦が材木商を営んでおりましたので学校を卒業すると鎮南浦に働きに行きました。

二十才の時おばの甥になる人もそこで働いておりましたのでその方と結婚しました。

主人は支那事変に行き一度は元気で帰ってきましたが、大東亜戦争に

二度目の応召、戦争が激しくなりましたので昭和十九年八月私は子供四人長男十才次男八才長女六才次女二才を連れて着のみのままで帰って来ました。その時は荷物は何も送る事が出来ませんでした。途中生きて帰れるやら不安でしたが、親子五人お陰様で無事帰国することが出来ました。

家には義母と義父の母の二人が住んでいました。義父は船に乗っていませんでした。

帰ってからは四人の子供を育て学校にも行かせなければならぬので畠を作りながら男の働く力仕事にも出ました。朝は四時頃から夜遅く迄馴れない仕事を子供の為と一生懸命働きました。

両親が近くへおりましたので、お金が足りない時は借りに行きました。父は九十七才、母は九十三才迄生きてくれて助かりました。

長男は親類や皆さんのお陰で高校を卒業して日立造船に就職することが出来ました。

次男は中学を卒業すると直ぐ日立造船に就職。夜間の高校へ四年間行きました。大学へ行きたいと大阪の日立造船へ転勤を申し込み夜間の立命館大学を受験し合格しました。働きながら四年間頑張りました。

毎日仕事で済み、夜間大学から帰り火の気のない処で勉強するので「お父さんが生きていてくれたら昼のに行かれるのに。」と一度だけ手紙を寄越しておりましたので可哀想でした。昼間は働いているが夜間の授業料が足りないので毎月の送金は大変でした。

二人の女の子にもせめて高校だけは行かせてやりたいと思い兄に相談しましたら「行きたいと言うのなら行かせてやれ。」とのことで行かせました。

最近は妻への扶助料が増えましたので楽になりました。二人の娘も結婚して孫もみんなで八人おります。

長男の娘二人も結婚しました。私は二十九才で一人になりましたが早や八十才が近くなりました。

今年の三月二十七日には義父と主人の五十回忌を弔おうと思っています。

嫁さんが大事にしてくれ、食事と一緒に食べさせて貰い有難いことだと思っております。生きていてよかったと毎日有難く過ごさせて貰っております。

体 験 記

因 島 市 岡 野 ミチコ

戦後五十年、今更あの悲惨な戦争を振り返りたくないけれど、次第に風化されつつある、あの大東亜戦争がどんなに日本国民を苦しめたか……今の平和が当たり前と思って居る現代の若者、いや、実際に体験している私たちでも平和に馴れて辛かった事も、ともすれば忘れつつある現在、思い出の一端を記して見ましよう。

昨日のことは忘れても、五十年前の事は、はっきりと脳裏に刻み込まれている。

昭和十二年七月七日、支那事変勃発。最初の召集令状が、私の町に十何人かに一度に来了。まさか、主人がその中の一人とは……。何の猶予もなくあわただしい出発で、取り乱すスキもなく真新しい軍服に赤だす

きを掛けた悲想なまでの緊張した主人の顔は、他人の様に思えた。

町中の人に日の丸の小旗を振って見送って貰った。近づく事も声をかける事もできない。唯々群集と共に見送った。当時、私は二十五歳で七ヶ月の身重で、五歳の長男の手を引いて汗をふき乍ら、港の栈橋まで約一里の道を小走りに走った。まだ、戦争と云う実感はない。何か大変な事が起きたと思う位であった。

人の噂で、「この戦争は長期戦になるので、二年位したら交代があるよ」との話が心の底に一つの慰めの様に広がっていた。北支に渡った主人から度々軍事郵便が来るけど、何度も印で押した様に同じ文句であった。

噂通り二年余りで軍務を終えて帰還してくれた。もうこれで行く事がない様にと祈っていたが、戦局はいよいよ激しく、又三年目、昭和十九年秋、今度は徴用であった。主人は船を持って居たので、船主船長として夜中に誰にも知らさず、隠れる様にして出発した。私の実弟も、新婚早々機関長として乗船した。

銃後の国民の合言葉は、一億玉碎であった。

今度は南国比島レイテ島に向け出発したらしい。沖縄から便が来た。

「自分は、今、実に澄みきった気持ちで南へ南へと向っている。何も思いわづらう事はない、すがすがしい心でいる。体に気を付けて子供を立派に育ててくれ。頼む。」と、最後の便を受け取った。

気丈夫に生きた積もりでも、所詮女は弱し。いやな予感が脳裏を去来する。誰にも見せず佛壇の奥にしまい込んでしまった。

何のための戦争だったのか、生き残った者の愚痴かと思われるが、生きていく限り忘れられない、あの当時の怒り腹立ち。何処へ持って行き

ような悔しさ、悲しさは戦後の苦難に耐えて生き抜いた者のみ味わう悲惨な戦後の母子世帯であった。

私一人ではない。多くの仲間がいる。共に頑張らねば……。私には大切な子供が二人いる。そして年老いた両親も居る。弱音をはく事は許されない。

人生の最大の不幸に遭遇した者は、我慢する事、耐える事には馴らされて来たので、兎にかく我武者羅に働いた。自分の体を酷使する事が使命の様に。そして、何もかもが忘れられる様にも思えた。

当時を振り返れば、今更乍ら感無量である。よく生きて来たものだ。

生きていて良かったと思う時には後がない。尚今でも健康で地区の遺族会や老人会のお世話に生きがいを持って、あたたかい家族に囲まれて幸せな恵まれた日々を有難く過ごさせていただいて居ります。

地球上に戦いの日々の終わります様、祈って止みません。